

## 道徳科授業力向上に向けての教員研修のあり方についての考察 ～ローテーション TT 道徳の実践を通じた OJT の取り組みから～

Consideration on the ideal way of teacher training to improve moral-  
education teaching ability  
OJT approach through “Rotation TT moral-education” practice

佐々木 篤 史\*  
Atsushi SASAKI

### 要旨

2019年から中学校で「特別の教科 道徳」が実施されているが、道徳科の「質的転換」には未だに課題が残っている。道徳科の授業力向上を目指した校内研修を実施することが求められるが、実際には研修を実施する時間をとることは難しい。OJT（オン・ザ・ジョブ・トレーニング）としてローテーションTT道徳を実施することが、研修の時間を確保できない場合にも授業力向上に資する研修になりうると考え、学年所属教員で学年5クラスのローテーションTT道徳の実践をし、その検証を行った。

検証の結果、教員同士の授業に関する会話が増え、教材研究の質の向上や授業実践への意欲につながり、授業力の向上につながることが期待できる。生徒にとっても多様な教師の考えと指導法に触れることで見方・考え方を広げ、考えを深めることにつながった。

**キーワード：**道徳科 OJT 教員研修 ローテーション道徳 ティームティーチング

### 1. はじめに

中学校では2019年から完全実施となった「特別の教科 道徳」（以下 道徳科）であるが、実施以前の2012年に東京学芸大学が行った調査<sup>1)</sup>では「道徳の授業の実施状況の受け止め（教員）」において「十分実施できていないと思う」と回答している割合が、小学校教員が66%であるのに対して、中学校教員が75%であった。また、同調査において、中学校教員の25%が「十分実施できていると思う」と回答している<sup>2)</sup>が、2012年に文部科学省が実施した「道徳教育実施状況調査」では、「十分な指導時間が確保できない」が小学校教員の8.6%、中学校教員の15.1%と、小学校の2倍近い割合で回答されていることや<sup>3)</sup>中学校で他の教科、領域に置き換えられている実態から鑑みても、前述の25%の内、35時間の「道徳の時間」をすべて「道徳の時間」として取り扱ったものは少ないと推測される。

また、文部科学省の調査では「道徳の授業を楽しいあるいはためになると感じている割合（児童生徒）」の割合が、小学校1・2年生で89.4%と高いものの、小学校5・6年生では64.9%と下がっていることから、学年が上がるにつれてその割合が低下している傾向が読み取れる。さらに中学校では、1年生で55.1%、2・3年生で約47%となっており、その傾向が顕著である<sup>4)</sup>。これは教員が感じている「指導の効果を把握することが困難」であることや「効果的な指導方法がわからない」ことなど<sup>5)</sup>が雰囲気として生徒に対して伝わっているものと考えられる。

このような経緯を踏まえ、「道徳教育の在り方に関する懇談会」の指摘を受けて、特別教科化がめざすものとして、量的課題に対して「量的確保」、質的課題に対して「質的転換」がそれぞれあげられた<sup>6)</sup>。「量

---

\* 附属中学校 Junior High School, Faculty of Education, Hirosaki University

的確保」の点では、特別教科化によって教科書が導入されたことにより、多くの学校である程度の成果が見られたものとする。その一方で「質的転換」については、授業経験の圧倒的な不足も相まって、未だに多くの課題が残っているものと推察される。

他方、学習指導要領解説（2017）では「道徳科は、主として生徒をよく理解している学級担任が計画的に進めるものであるが、学校の道徳教育の目標の達成に向けて、学校や学年として一体的に進めるものでなくてはならない。そのために、指導に際して全教師が協力し合う指導体制を充実することが大切になる<sup>7)</sup>」（p.86）とされ、「道徳科の指導力向上のために、全教師が、授業の準備、実施、振り返りの各プロセスを含め、道徳科の学習指導案の作成や授業実践を少なくとも年に1回は担当して授業を公開するなど、学校全体での積極的な指導力向上の取組も望まれる<sup>8)</sup>」（p.87）とある。しかし、教員の働き方改革が急務であると考えられている昨今、全教師が協力し合う指導体制の構築は非常に難しいものとなっており、本校でも同じことが言える。

本校の以前の取り組みを例としてあげると、「道徳の時間」に対する研修の方法として、道徳強化期間を設定し、その期間内で管理職を除いたすべての教員が指導案を作成して授業実践を行うという取り組みがされていた。しかし、道徳科となり、「量的確保」が進められた分、学級担任の負担が大きくなったということで、学年所属の副担任が指導案を作成して授業実践を1回行うという取り組みに改変された。働き方改革の観点からは、効率的な変更であるものの、毎週授業を行う学級担任には指導案を書く時間的な余裕がないままである一方、強化期間に授業を1クラス1回だけ行う副担任が指導案を書いている実践にとどまっていたため、授業力向上になかなか結びつかない様子が見られた。

このように「質的転換」が求められている一方で、教師の多忙感により「量的確保」をするのがやっという状況の中で、道徳科授業力の向上に向けた教員研修の場の確保が大きな課題である。新しい学習指導要領で求められている評価のこと、GIGAスクール構想に伴うICT機器の利活用のことなど、求められていることが多く、道徳科の研修のみで全体での校内研修の場を設定するのが困難であるため、ローテーション道徳とチームティーチング（以下TT）道徳を組み合わせたローテーションTT道徳を実践することが、授業力向上に資する教員研修（OJT）になりうると考え、実践に取り組んだ。

## 2. ローテーションTT道徳について

### （1）概要

ローテーションTT道徳は愛媛県の公立中学校長だった坂井親治が提案したものである<sup>9)</sup>。坂井（2017）は「学習指導要領改訂によって求められている「考え、議論する道徳」「アクティブ・ラーニング」「評価」等への取り組みを、担任だけに任せるには限界がある。また、昨今指摘されている「学校の多忙化」の中で、新しい取り組みの研究の時間を捻出するのは、多くの教員の過重負担となる」（p.2）と述べ、その解決のための取り組みの一つとしてローテーションTT道徳授業を提案している。

坂井は、複数教員による道徳の授業の実施について、以下の3つのタイプに分類している。

- ①学級担任TT型 学級担任がT1、副担任がT2となる。従来の担任が授業をしているところにT2の教員が加わる。
- ②専任TT型 道徳専任教師がT1となり、学級担任がT2となる。学級担任がT1となることもある。
- ③ローテーションTT型 学年の教員全員がローテーションでT1となる。学年団の教員を中心に、複数教員がローテーションで組織的に道徳の授業を実施する。（p.2）

また、①～③のタイプについての検証結果については、以下のように述べている。

- ①学級担任が、道徳の授業を得意とする学級とそうでない学級との温度差が課題となる。複数教員の実施であるため、授業数の確保はできるが、T2で入った教員との授業参画の温度差が見られ、教員の指導力の向上や負担感の軽減にならなかった。
- ②専任を担当する教師が指導力があり、道徳の授業が得意な教師がいる学年とそうでない学年との温度差

が課題となる。授業数の確保はできるが、学級担任が専任教師に頼ってしまい、相互の授業力を高めるには不十分であった。

- ③生徒にも教師にも最も好評な複数体制だった。教師は、一度の教材研究で複数回の授業を実施するため、授業準備にゆとりが生まれ、教材研究を深められる。前回の授業の反省を生かして他の学級で授業の再構築ができ、結果的に指導力が高まった。(p.3)

これまで筆者は上記①②のように、副担任である自分がT1、学級担任がT2という形で、TT道徳を実践してきたが、坂井の検証結果と同様の印象を受けている。特に、教員の道徳の得手不得手による授業参観の温度差や得意な教員への依存といった指摘は大いに納得できる。①や②の場合、片方の教員が遠慮をしたり、萎縮したりといった傾向があるが、これは前述した「十分実施できていないと思う」教員が75%いるように、多くの教員が道徳の授業の実践に対して自信を持っていない状況にあることも関連していると思われる。また、「主として生徒をよく理解している学級担任が計画的に進めるものである」ことから、担任以外の教員は「あくまでも自分はT2である」として、良く言えば陰ながらサポートする立場に徹する、悪く言えば授業を共に作り上げる責任を放棄することにもなりかねない。複数教員が主体的に授業に参画し、その取り組みが授業力の向上につながっていくためには、①や②ではやはり不十分であると考え、③ローテーションTT道徳を追実践することとした。

## (2) 方法

- ①授業力向上に資するOJTにするために、ローテーションTT道徳を以下の方法で実施した。

### ・対象

2学年教員9名と教務主任を合わせた10名で、ペアを5つ組み、2学年5クラスをローテーションして1時間ずつ授業を実施する。

### ・時期

12月初め～1月中旬にかけて実施。冬休みをはさんで5週に渡っての実施となった。

### ・時間割作成上の工夫

教務主任が、各ペアを月曜日から金曜日までに1組ずつ入れ、週に1回授業があるように設定した。その際、学級担任が必ず自分のクラスを参観できるようにせず、空いている教員が積極的に参観することで、時間割作成上の負担を減らした。

### ・組み合わせ

学年の道徳担当が、生徒の実態を踏まえて複数の内容項目の中から教材の候補を10本程度決め、各教員がその中から複数を選択し、同じ教材を選択した教員同士でペアを組んだ。

その際、学年所属であっても、担当教科によって担当していないクラスがあったため、ペアのどちらかがいずれかの学級を担当しているように配慮した。また、優先順位は低くしたものの、主体的な授業参画を期待して、年齢や経験などで遠慮や萎縮がないように意図的にペアを組んだ。

### ・T1、T2の役割分担

T1とT2の役割を授業者と板書係というように固定するのではなく、授業で取り入れる指導法や生徒の形態によってフレキシブルに対応することを前提とした。実際の様子としては、グループ活動の際にそれぞれがグループの話し合いに対して追発問をする場面や、教員が役割演技の一端を担う場面など工夫する様子が見られた。

### ・その他（授業力向上に関する情報の共有）

ローテーション道徳を実施する前段階として、道徳科に関する雑誌や書籍を回覧し、道徳科の授業づくりに対する意識付けを行った。

- ②実践の効果を検証するために、ローテーションTT道徳に対してのアンケートを以下のように実施した。

### ・教員アンケート

前述の10名に対して、授業が5回の内3回を終えた冬休み（12月下旬）の時点で、Googleフォームを使って実施した。

質問内容は次の10個の内容に対して、4件法を「4：とても感じた、3：まあまあ感じた、2：あまり感じなかった、1：まったく感じなかった」の項目で行った。また、実施してのメリット、デメリットと自由記述を書く項目を設けた。

- (1) [やる気向上]
- (2) [教材研究の質（教材理解）向上]
- (3) [教材研究の質（価値理解）向上]
- (4) [教材研究の質（学習過程の構想）]
- (5) [授業力の向上（生徒とのやりとり）]
- (6) [授業力の向上（板書）]
- (7) [授業力の向上（発問の精選）]
- (8) [授業力の向上（評価・生徒の様子の見取り）]
- (9) [教師間の学び合いの場面の増加]
- (10) [教師間の授業についての会話の増加]

#### ・生徒アンケート

1月11日と12日の朝の会、帰りの会の隙間時間で、Google フォームを使って実施した。

質問内容は「(A) 先生方が各クラスを回ること、(B) 先生が2人で授業をすること」に対して、4件法を「4：どんどんやってほしい、3：どちらかといえばやってほしい、2：どちらかといえばやってほしくない、1：やってほしくない」の項目で行った。また、その理由や授業の感想などを自由に記述できる項目を設けた。

### 3. 成果と課題

2-(2) ②で実施したアンケートを基に考察していく。

#### (1) 教員アンケートから

右の図1は、ローテーションTT道徳に取り組んで教員自身が感じた効果についてである。また以下は、自由記述についてまとめたものである。

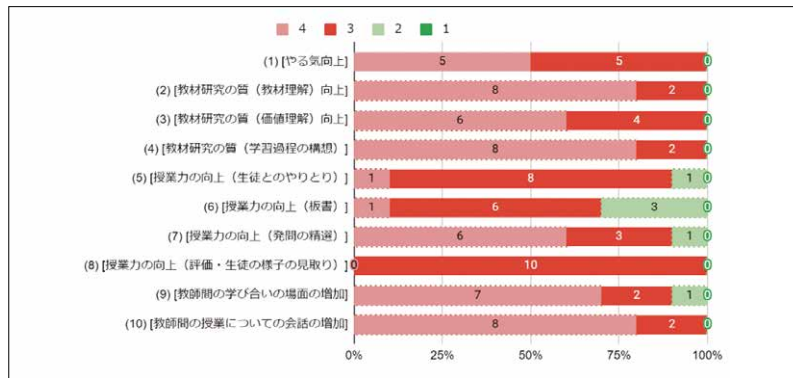


図1 「ローテーションTT道徳に取り組んでみて（回答）」

#### [アンケートの自由記述]

囲みは授業力の向上に関して、下線は教材研究の質向上に関して、網掛けはやる気向上に関しての記述に対して筆者が加筆した

- (A) 1回目よりも回数をおこなうことで授業の質が高まっているように感じています。最初の生徒に申し訳ない気持ちも高くなってきています。普段よりも教材を研究しようとする意識が高まり、道徳の授業が楽しくなりました。いろいろな生徒の考え方に触れることは楽しいことだと実感しました。1月も頑張ります。
- (B) ねらいとする価値に向けてどのように迫っていくかは、一人で考えるよりTTで考えた方がいろいろな見方ができてよかったし、授業ではこの部分が肝になるので、勉強になることが多かった（自分の力が向上できたかは別にして）毎週、違う教材での準備をしなくてもよいことは大変なメリット。この取り組みが続いて、授業実践のストックがたまっていくと、教材研究の時間が減り、違う業務に集中できる。教科書として扱っていかねばならなくなったので、ある程度の「効果的であった実践」があると、授業者としてはとても楽です。
- (C) 一回目の反省を生かして、2回目には手ごたえのある授業ができたときに、道徳の授業が楽しいと思いました。TTを組む先生と次の授業の改善点を話したり、佐々木先生から別な視点でア

ドバイスをもらい、様々なチャレンジができています。『次のクラスではこうしよう』と、様々なアイデアも言い合え、新しい試みができるのも、TTの良さだと思います。生徒の振り返りをすぐに、次の授業に生かして、改善できるのも今までの一回きりの道徳と違って、良い点だと思います。

- (D) 同じ教材を複数回行うので、前回の反省を次回に生かすことができた。回数を重ねる毎に課題も出るが、それをクリアできるようTTを組む先生と話し合って、様々なやり方にチャレンジし、授業改善につなげることができた。当然ですが、事前の綿密な打合せが必要になります。
- (E) これまでの道徳強化週間と比べると、前向きに取り組むことができていく感じがします。悲壮感が少ないというか…楽しみながらできているというか…全クラスでローテーションというのも最初は回数が多いな、という印象でしたが『次はこんな感じにしよう。』とか『次はこれにチャレンジしてみよう。』とか『ココがイマイチだったから次はこうしたらどうだろう？』とか…いろいろできて、深められてるな、と感じています。学年の中で道徳の話題が飛び交ったり、感想を伝え合ったり、そういう雰囲気もいいなあと思ったり、勉強になるなあと思ったり。このような形を提供してくれている道徳担当に感謝感謝です。
- (F) 3回行いましたが、毎回違うパターンでやってみました。個、グループ、発問内容と変えてみてどれが良かったか見えてくるものがありました。3回目でなんとなく指導案が固まり、授業後にじっくりく部分があったように感じました。一つの教材を何回も授業することは初めてなので、教材研究は深くなったと思います。また一人で考えるより視点が広がり、様々なパターンが生まれると思いました。授業中、役割分担することで、授業者が進行に集中できるのが良いと思います。また2人なのでより生徒のつぶやきや表情を拾うことができました。ただ、打ち合わせを緻密に行わないとずれが生じるのでその時間が大切だと感じました。1月は残り2クラスあるので、3回の授業の反省点を活かし新たなパターンでできればと思います。
- (G) 普段は学級担任と一部の先生だけで行われている道徳の授業に学年全員で取り組むことにより、生徒を多面的、多角的に見取ることにつながった。また、TTで行ったため、指導案検討会～授業～反省会～授業改善～次の授業とよい循環の中、よりよい授業を目指すことができた。授業についての省察検討が教師間で気軽に行われたことで、道徳強化期間の取組をあまり負担感がなく行うことができた。
- (H) 教材を共同で考えることで、価値項目や発問についての考えが深まりとても勉強になりました。授業後に教師間で行う振り返りも次につながる貴重な研究の場となり、学年のチーム力アップにつながっていたと思います。
- (I) TTで授業することによって、経験値が少ない教師（初任も含む）にとって、授業の進め方など学習ができる良い機会だと思います。個人的には附属だけではなく、他の公立学校などにも普及して欲しいです。
- (J) 授業改善の視点で考えると、複数回実施できるローテーションは有効であると考えられる。TTについては、指導案作りの段階から共同できる点が良いと思った。また、授業では生徒同士が議論している場面などで問い返しができたり、生徒の考えを把握するためにどんどん話し合いに参加したりできる点が良いと思う。

グラフからは(2) [教材研究の質(教材理解)向上], (4) [教材研究の質(価値理解)向上], (10) [教師間の授業についての会話の増加]について、非常に高い割合で効果を実感していることがわかる。特に(10)について、これまでも、学級担任同士で次の教材をどう扱えばいいかという話題はされていたが、ローテーションTT道徳になることで、会話がより増えたことが効果として実感されている。また、会話量が増加しただけでなく、(2)～(4)の[教材研究の質向上]が効果として実感されていることから、教材の理解や道徳的諸価値の理解、指導過程の構想につながる会話が積み重ねられたことが伺える。さらに、会話の量、質の向上から、(1) [やる気向上]のようにこういう授業をやりたいという意欲の向上にもつながったと



考えられる。

他方、(5)～(8)の[授業力の向上]については、4の割合が少なく、2の回答が見られている。しかし、これは効果がないということではなく、実践の途中経過であることも関連していると思われる。以下にあげたアンケートの自由記述からは、全体的に前向きな意見が見られることから、残り2回の実践が授業力の向上につながっていくものと考ええる。

また、(8)[授業力の向上(評価・生徒の様子の見取り)]では10人の教員が全員「3」を選んでいる。(F)の「2人なのでより生徒のつぶやきや表情を拾うことができました」という記述にあるように、生徒の学習活動の見取りについての意見も見られた。これは道徳科の「評価」につながる部分である。教員は、TTの実施により余裕が生まれ、教室の前にいることで教室の横や後ろからの観察では気づけない視点を獲得することができている。つまり、教員は、授業中であるにも関わらず、客観的に生徒を観察することが可能になっていると言える。このように、多くの教員が生徒の学習活動を見取り、評価につながる視点を獲得することは、総括的評価として所見を書く際にも、大いに役立つものである。また、(10)のように教員同士での会話が増えているため、評価についての相談をすることにもつながり、より生徒を「認め、励ます個人内評価」につながっていくことが期待される。

他にも(B)の「この取り組みが続いて、授業実践のストックがたまっていくと、教材研究の時間が減り、違う業務に集中できる。」という、働き方改革の視点からの意見が見られた。働き方が改善されることは主たる目的ではないが、研修を積むことが多忙感を生むのではなく、結果的に改善につながっていくことは望ましい研修の在り方であると言える。

課題として、(D)の「事前の入念な打ち合わせが必要だ」という意見が見られたが、これは成果につながる課題であるため、取り組みを継続していく中で改善されていくものだと考える。

以上のように、教員アンケートからはローテーションTT道徳は道徳科授業力向上のOJTの取り組みとして、非常に効果的であることが明らかになった。

## (2) 生徒アンケートから

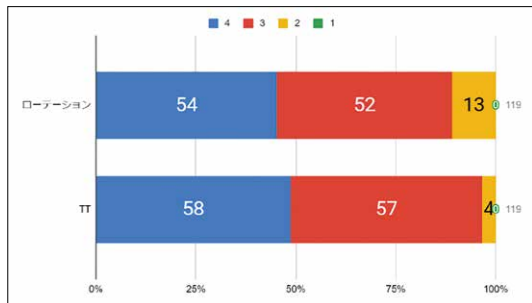


図2 「先生方の取り組みについて(回答)」



図3 「ワードクラウド(自由記述)」

では、授業を受けている生徒はどのように感じているのだろうか。

図2は生徒に対してのアンケートの結果である。また、図3は自由記述をテキストマイニングをしてワードクラウドで表したものである<sup>10)</sup>。さらに自由記述からローテーションTT道徳に対するメリットとデメリットとして考えられるものを以下のようにまとめた。

### [アンケートの自由記述]

#### メリット

- (あ) 普段の授業で関われない先生と接点があった
- (い) いろいろなやり方があって、いつもと違う考えが出てきた
- (う) いつもの授業がマンネリ化してしまうので、次はどんな授業かだれの授業か、楽しみになった
- (え) 先生が目が行き届くので緊張感をもって授業に取り組めた
- (お) 一方の先生が板書を担当しているので、テンポがよく、話す量が増えた

- (か) わかりやすく板書をしてくれるので、他の人の考えを忘れることなく参考にできた
- (き) もう一人の先生が追加で質問してくることで、考えを深められた
- (く) 二人の先生の考えも参考にし考えられた

#### デメリット

- (ア) 監視されていると感じて集中できない、途中から入ってくると集中が途切れてしまう
- (イ) 先生方が特別にやるので、時間をオーバーしてしまうことがある
- (ウ) 授業前後に課題があった
- (エ) 学級担任の先生の授業を受けたい
- (オ) 関わったことがない先生なので、新鮮だが、関わりがないから緊張や警戒をしてしまう
- (カ) 進め方になっていないので、うまく考えられないときがあった
- (キ) ローテーションの中で、毎回同じ人が指名されていた

図2から、大部分の生徒がローテーションでいろいろな先生が授業をすることと、TTで授業をすることに対して好意的に捉えていることがわかった。

図3のワードクラウドでは「新鮮」という言葉が大きく出てきている。「(あ) 普段の授業で関われない先生と接点ができた」「(い) いろいろなやり方があって、いつもと違う考えが出てきた」「(う) いつもの授業がマンネリ化してしまうので、次はどんな授業かだれの授業か、楽しみになった」とあるように、生徒にとって多様な教員の考え、指導法にふれることで、考える方法や視点に変化があったことが伺える。これらの「新鮮」で表されるメリットはどちらかといえば、ローテーション道徳の良さと言えるだろう。

また、ワードクラウドで「黒板」「わかりやすい」「うけやすい」「効率」といった言葉が出てきている。「(お) 一方の先生が板書を担当しているので、テンポがよく、話す量が増えた」「(か) わかりやすく板書をしてくれるので、他の人の考えを忘れることなく参考にできた」とあるように、普段の授業では板書をする分、発言量が減ってしまったり、発現量を確保するために板書を少なくすることで、どんな意見が出ていたのかを忘れてしまったりするという指導上の課題について、生徒は効果を実感していたことがわかる。さらに、「(き) もう一人の先生が追加で質問してくることで、考えを深められた」「(く) 二人の先生の考えも参考にし考えられた」のように、一人で授業をしているときよりも考えを深められたという記述も見られた。自由記述では「今回は研究のために二人で行ったと思うが、これからは研究の目的ではなくて普段の道徳でも取り入れていってほしいと思った。また、先生にとっても一人で授業をするよりも心強い(?)と思うので先生方で話し合って決めてほしいと思う。」(原文ママ)という記述も見られ、TT道徳の良さを感じる生徒も多かった。

他方、(ア)～(キ)のようにデメリットもあげられている。少数ではあるが、今後の実践の際に考慮する必要がある内容であるので、考察を加えていく。

「(ア) 監視されていると感じて集中できない、途中から入ってくると集中が途切れてしまう」については、道徳強化期間で参観する授業担当以外の教員に対する内容のため、ローテーションTT道徳の検証としては取り上げられない。また、「(え) 先生の目が行き届くので緊張感をもって授業に取り組めた」と逆に捉えている生徒もいるため、(ア)に関しては一概にデメリットとは断定できない。

「(イ) 先生方が特別にやるので、時間をオーバーしてしまうことがある」「(ウ) 授業前後に課題があった」「(エ) 学級担任の先生の授業を受けたい」について、教員が準備をしてきた分、最後までやりきりたいということもあり、時間をオーバーしてしまうことが見受けられた。また、授業中の「考え、議論する」場面に十分な時間を設定するために事前に教材を読んだり、事後にふりかえりを書かせるなどの課題が設定されることが多かった。そういったことも含めて、学級担任の授業の方がいいと考える生徒も少なからず見られた。これらに関しては、授業時間内に授業を終えることはもちろん重要である。その一方で、一部の生徒の中では道徳科が重要視されていないことが要因として考えられる。1で述べたように、道徳科自体が、授業に重きが置かれてこなかったため、道徳科の目標にある「人間としての生き方についての考えを深める」ための時間になりづらく、生徒にとっても意味のある時間になりにくかった。今回のような質的転換を目指した取り組みによって、例えば反転学習のように教材を読んで予習をすることや、授業後に学びをふりかえる時間を設定することが「人間としての生き方についての考えを深める」ことにつながれば、生徒にとっても意味

のある時間となり、特に（ウ）の内容がメリットになりうるものとする。

「（オ）関わったことがない先生なので、新鮮だが、関わりがないから緊張や警戒をしてしまう」「（カ）進め方になっていないので、うまく考えられないときがあった」については、（あ）～（う）と逆の内容となるが、適応しづらい生徒もいるということを配慮する必要がある。その一方で、多様な指導法が推奨されており、道徳科の見方・考え方を生かした学び方を身に着けさせることは重要であるため、授業を担当する教員が変わらないとしても、多様な指導法を取り入れていくことが求められる。また、教員と生徒との関係性で考えると、年に1回だけの取り組みではなく2回以上の取り組みが関係性を構築していく上で望ましいのかもしれない。ただし、本校の実態として、教育実習生が道徳科授業を担当することもあり、学級担任の授業が減ってしまうことも考慮していく必要がある。

「（キ）ローテーションの中で、毎回同じ人が指名されていた」という点に関しては、ペア以外の教員との情報共有に課題があったと言える。生徒を評価するという点で、「この授業ではこの生徒が自分ごととして考えていた、多面的・多角的に考えていた」という情報を共有することによって、発言が少ないなどの理由でまだ評価が難しい生徒に対してどのようにアプローチをしていくのかという個に応じた指導の改善につながる部分であり、今後の実施に向けて改善が必要な部分である。

以上のように、生徒アンケートからは一部改善が必要な部分はあるものの、ローテーションTT道徳を取り入れることが好ましく、効果的であることが明らかになった。

#### 4. おわりに

校内研修の時間を設定するのが難しい中、道徳科授業力向上につながるOJTとしてのローテーションTT道徳実践について、その検証を行ってきた。

教員にとって、複数人で教材研究に取り組み、授業を構想することと、複数クラスで授業実践を重ねることが、授業の質を向上させることにつながった。また、このような授業力向上の取り組みが続いていくことで、道徳科が「人間としての生き方についての考えを深める」ための時間になっていき、生徒にとっても、新鮮な気持ちで授業を受けられるということの他に、より充実した時間を過ごすことにつながることが期待できる。

他方、教員の働き方の見直しが求められている中で、教員採用試験の倍率は低下の一途をたどっている。2000年代の採用枠がない時代とは異なる理由で、教員になりたいけれど厳しい労働環境のため諦めざるをえない状況になっていると考えられる。また、教員の年齢構成を人口ピラミッドで表せば50代が多く、若手の枠が増えてきているものの、就職氷河期世代に当たる中堅層が非常に少ない歪な形となっている。全国的にも教員志望者が減っていることと若手を育成する中堅層が薄いことから、実践研究が積み重ねられてきた教科であっても、その成果をつなげていくことが難しいのではないだろうか。ましてや、積み重ねの少ない道徳科の実践ではなおさらである。逆に考えれば、積み重ねが少ない分、全教員で道徳科の授業を作り上げていく仕組みを構築していくことができれば、新たな実践を生み出し、積み重ねていくことにつながっていく可能性がある。働き方改革と教育の質の向上を両立させていくための取り組みとして、非常に有効な方法であると感じている。

OJTとしての研修であるこの取り組みが、全教員で取り組めるものとして学校の仕組みになっていくことと、同じような状況にある公立学校にも普及させていくことを課題として、継続して取り組んでいきたい。

---

1) 文部科学省（2016）,『平成28年5月27日 教育課程部会 考える道徳への転換に向けたワーキンググループ 資料4「道徳教育について」』, p.15,

[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/078/siryo/\\_icsFiles/afieldfile/2016/08/05/1375323\\_4\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/078/siryo/_icsFiles/afieldfile/2016/08/05/1375323_4_1.pdf) (2022年1月4日閲覧)

2) 〃

3) 文部科学省（2016）,『道徳教育実施状況調査結果の概要』, p.10,

[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/doutoku/\\_icsFiles/afieldfile/2016/08/09/1222218\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/doutoku/_icsFiles/afieldfile/2016/08/09/1222218_2.pdf)



- 4) 文部科学省 (2016), 『平成28年 5 月27日 教育課程部会 考える道徳への転換に向けたワーキンググループ 資料 4 「道徳教育について」』, p.15
- 5) ♪, p.16
- 6) ♪, p.17
- 7) 文部科学省 (2017), 『中学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説「特別の教科 道徳編」』, p.86.  
[https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387018\\_011.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387018_011.pdf) (2022年 1 月 4 日閲覧)
- 8) ♪, p.87
- 9) 坂井親治 (2017), 『どうとくのひろばNO.18 「「ローテーション道徳授業」のすすめ」』, pp.2-5, 日本文教出版
- 10) ユーザーローカル テキストマイニングツール (<https://textmining.userlocal.jp/>) による分析